

本発表の目的は、ヤーコブ・フリードリヒ・フリース(Jakob Friedrich Fries, 1773-1843)およびフリース学派、新フリース学派の活動を媒介としたカント受容という観点から、パウエル・ベルナイスの超越論的観念論に関する議論に認められるべき思想史的な布置を見定めることである。

パウエル・ベルナイス(Paul Bernays, 1888-1977)は、主に20世紀に活躍したスイスの数学者・論理学者である。一般にベルナイスの業績は、数学や論理学に関するものが有名であるが、それと同時に、それらの活動の背景をなすものとして、哲学的な学術活動も行っていたことが知られている。具体的には、フリースの哲学のリバイバルとして20世紀初頭に成立した「新フリース学派」という学派の構成員として活動を展開しており、新フリース学派の創設者であるレオナルド・ネルズン(Leonard Nelson, 1882-1927)の全集の出版に際しては、編者として関わっている。

ベルナイスは1913年に、この学派が刊行していた『フリース学派論集・続編』の第4号に、「超越論的観念論について(Über den transzendentalen Idealismus)」と題された論文を投稿している。このベルナイスの論文の主眼は、カント哲学におけるアンチノミーの議論を再構成することを通じて、カントの超越論的観念論の立場、とりわけ空間と時間の超越論的観念性を再確認することにある。このベルナイスの論文そのものは、30頁にも満たない小規模なものであることに加えて、その文章の晦渋さも相俟って、この論文だけからベルナイスの目論見や立ち位置を推し量るのは容易ではない。しかし、この論文が出た5年後の1918年に、『フリース学派論集・続編』の第5号に、ミハエル・コヴァレフスキーが、ベルナイスの論文の実質的な解説に相当する論文を発表しており、このコヴァレフスキーの論文を手引きとすることによって、ベルナイスの記述の意図を推し量ることができる。そこで本発表では、このコヴァレフスキーの論文をあわせて参照することによって、ベルナイスの議論の力点を確認するとともに、とりわけフリース受容という観点から、ベルナイスの論文に認められるべき思想史上の位置づけを明らかにすることを目指す。

このベルナイスらの論文の特色の一つは、カントにおける超越論的観念論の議論を裏づけるものとして、アンチノミーの議論を引き合いに出している点に認められる。この観点からベルナイスらは、特に数学的アンチノミーの再構成を通じて、空間と時間に関する超越論的実在論の立場を退けて、これらに関する超越論的観念論の教説を裏付けようとする。そしてベルナイスらは、カントの超越論的観念論はアンチノミーによって初めて基礎づけられるという着眼点の典拠を、フリースのうちに求めようとする(Bernays[1913], S. 3; Kowalewsky[1918], S. 7)。

しかし、このベルナイスらの議論、とりわけ彼らによるフリースに対する参照指示には、二つの問題が認められる。第一の問題は、ベルナイスらがアンチノミーの議論に着目するにあたって、フリースに参照指示をつけているという事実そのものうちにある。もとよりこの着眼点そのものは、カント自身の記述のうちその典拠を認めることが可能であり(KrV, A490=B518)、それゆえアンチノミーの解決によってはじめて超越論的観念性が確認されること自体は、今日のカント解釈においては半ば常識となっている。問題はむしろ、この事実を指摘するにあたって、フリース

に参照指示をつけることの妥当性である。というのも、たしかにフリースは主著の第二版である『新・人間学的理性批判』第1巻(1828年)において、「理性のアンチノミーの教説において[...]、超越論的観念論が詳しく証明されている」(Fries[1828], S. XXIV)と述べてはいるものの、超越論的観念論とアンチノミーの関係についての踏み込んだ言及は行っておらず、この着眼点をフリースに帰することには不自然さが残るからである。

第二の問題として、なぜベルナイスは「超越論的観念論」という論点に着目したのか、という点が挙げられる。実は、ベルナイスらが参照指示をつけているフリースの立場そのものは、この「超越論的観念論」という論点とは必ずしも親和的ではない。というのも、フリースが自らの立場を「超越論的観念論」として特徴づけるのは、もっぱらその初期思想に限られた傾向であり、とりわけ主著である『新理性批判』以降になると、「超越論的観念論」という立場に代わって、むしろ「理性の理論」というキーワードが前面に押し出されるからである。このように、ベルナイスらのカント受容と、彼らが参照指示をつけているフリース自身の記述のあいだには、齟齬が認められるのである。

この問題に対する解決の見通しを与えるのが、20世紀のベルナイスらと19世紀前半のフリースの間を架橋している、二つのフリース学派の存在である。彼らのフリース受容を支えている第一の契機が、彼らが属していた「新フリース学派」である。彼らのフリース受容は、この学派の一連の活動および、その設立者であるネルズンによるフリース解釈によって支えられている。実際、コヴァレフスキーがカントにおけるアンチノミーの位置づけを論ずるに際しては、ネルズンの『いわゆる認識問題について』(1908年)に参照指示をつけている(cf. Kowalewsky[1918], S. 19)。とはいえ、同書においても、「超越論的観念論のカントによる二つ目の証明」は、「アンチノミーの解決のうちに存している」という事実が簡単に指摘されるにとどまる(Nelson[1908], S. 635)。むしろ、このネルズンの指摘に際立った意義を与える知識社会学的背景をなしているのが、新フリース学派に半世紀先立って活動していた「フリース学派」の設立者であるエルンスト・フリードリヒ・アーペルト(Ernst Friedrich Apelt, 1812-1859)の『形而上学』(1857年)である。同書そのものはアーペルトの死後長らく埋没していたが、新フリース学派の勃興にもなって、その再発見が行われた。そして、ベルナイスによる当該論文の執筆に先立つ1910年に、新フリース学派の一員であるルドルフ・オットーの編集によって、同書の初の校訂版が出版されており、同書の出版がベルナイスらに与えた影響については、彼らのアーペルトに対する言及からも見て取られうる通りである(Bernays[1913], S. 24; Kowalewsky[1918], S. 39)。同書においてアーペルトは、フリースの論点を引き継ぎつつも、「超越論的観念論」という論点に定位して、フリースの議論の再整理を行い、さらにこの超越論的観念論を基礎づける狙いのもとで、カントのアンチノミーの精査を行っている(Apelt[1910], S. 398ff.)。

加えて、フリース学派において「超越論的観念論」の復権をもたらしたアーペルトに対する着目は、アーペルト自身の立場である、数学と哲学のあいだの連続性の強調という論点ともかかわってくる。ベルナイスがアンチノミーに着目することによって超越論的観念論の証明を企てたことのうちには、数学と哲学の連続性を強調するというアーペルト自身の論点のリバイバルとしての側面が重なりをみせているのである。